

氏名	人見 太一 (ヒトミ タイチ)
本籍	埼玉県
学位の種類	博士(学術)
学位の番号	博甲第110号
学位授与の日付	2022年9月5日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	皮膚の特性に基づいた主観的心地よさ及び リラクゼーション効果をもたらすタッチング方法の 検証－医療現場への導入を視野に入れて－

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	山 口 創
	(副査) 桜美林大学教授	鈴 木 平
	桜美林大学教授	松田チャップマン与理子
	国際医療福祉大学	只 浦 寛 子

論文審査報告書

論文目次

第1章 序論.....	1
第1節 医療現場において患者にリラクゼーションをもたらす意義.....	1
第2節 タッチングによるリラクゼーション効果.....	4
第3節 医療従事者によるタッチングの先行研究と本研究の課題.....	8
第4節 タッチングとリラクゼーションとの関連性について.....	15
第5節 皮膚の特性について.....	17

第2章 本研究の目的と構成.....	21
第1節 本研究の課題と目的.....	21
第2節 本研究で用いるタッチング部位について.....	22
第3節 本研究の構成.....	23
第3章 心地よさをもたらす下腿部と手に対する触れ方の検討【実験1】	26
第1節 目的.....	26
第2節 方法.....	27
第3節 結果.....	33
第4節 考察.....	36
第5節 本実験の限界と今後の課題.....	40
第6節 結論.....	41
第4章 下腿部と手へのタッチング効果の検証.....	42
第1節 目的.....	42
第2節 第4章で用いる対象者について.....	44
第3節 本実験で用いるアウトカム指標について.....	45
第4節 下腿部へのタッチングによるリラクセーション効果の検討【実験2】	50
第1項 方法.....	50
第2項 結果.....	54
第3項 考察.....	57
第4項 実験2の課題と今後の展望.....	59
第5節 手へのタッチングによるリラクセーション効果の検討【実験3】	62
第1項 方法.....	62
第2項 結果.....	69
第3項 考察.....	73
第4項 実験3の課題と今後の展望.....	75
第6節 まとめ.....	78
第7節 結論.....	80
第5章 医療従事者へのタッチングに関する調査研究.....	82
第1節 目的.....	82
第2節 方法.....	84
第3節 結果.....	90
第4節 考察.....	115
第5節 本章の限界と今後の課題.....	125
第6節 結論.....	126
第6章 総合考察.....	127
第1節 本研究の結果と考察.....	127

第2節 本研究の限界と今後の課題.....	139
第3節 結論.....	143
引用文献.....	144
謝辞.....	163

論文要旨

本論文は、皮膚の特性に基づいたタッチングの効果について明らかにするテーマで行われた。最初に文献のレビュー研究により看護師と療法士のタッチングに関する基礎的研究により問題点を明らかにし、その後の3つの実験と、アンケート調査による検討により、医療現場において効率的に導入できるタッチングの技法について明らかにしたものである。

まず1章で文献のレビュー研究により、従来のタッチング研究で検討されているタッチングの時間の長さや、触れ方、施術者の資格の問題が論じられ、先行研究で明らかにされているタッチングの種類や、タッチングの身体部位の問題点について明らかにされた。

2章では、1章で明らかにされた問題意識に基づき、本論文の意義や目的、論文の構成について論じられた。

3章では、本研究でタッチングにより期待される主観的指標として、心地よさや **comfort** に着目し、下腿部と手へのタッチングによって各々異なる触れ方によりもたらされる心地よさの効果について予備的に検証された。

4章では、同様に下腿部と手に着目し、各々で皮膚の特性が異なることに着目し、それぞれの皮膚の特性に応じた効果的なタッチング技法について検討された。先行研究から各々の部位への触れ方や速度に関する仮説を設け実験が行われた。指標としては心拍数のほか、主観的な痛み、身体感覚（足裏を用いたバランス感覚）を用いて測定が行われた。その結果、下腿部については秒速5cmの軽擦法が、手については手を包むように触れる技法が適していることが示唆された。さらにリラクセーションの指標として心拍数が最適であることや、下腿部・手への各々への異なる触れ方がリラクセーションを促すためにも最適であることが明らかにされた。これらの技法は、タッチング施術者に高い技術を必要とせず、かつ安全な方法であり、より多くの患者に適用できる可能性が示された。さらにより短時間のタッチングでも効果が見られたことから、今後の医療現場での応用可能性が高まるものであると考えられた。

5章ではそれらのタッチング技法が、看護師や療法士などの医療従事者にとって最適な方法として応用される可能性について、アンケート調査により明らかにすることを目的として行われた。看護師及び療法士計207名を対象に、通常の業務の中で行わ

れているタッチングの現状及び、本研究で明らかにされたタッチング技法について、医療現場への導入の可能性及びについて調査を行った。その結果、看護師と療法士では異なる傾向が見られたものの、概ねポジティブな回答が得られ、医療現場への導入が十分に可能であることが明らかにされた。

本研究の限界として、タッチング施術者と実験者が同一人物であるために起こる実験者効果が含まれている点や、施術者の手の温度や受け手との関係性によりタッチングの効果が変わりうる可能性もあり、それらの点が統制されていない点で結果の解釈は慎重にせざるを得ないと考えられた。さらに実際に医療現場で患者に対して行われた研究ではないため、患者への応用可能性については推測の域を出ず、今後は実際の患者に対して実験を行い効果を実証する必要性がある。

論文審査要旨

本論文は、従来の医療現場におけるタッチング研究において検討されてこなかったテーマである、身体部位によるタッチングの効果について詳細な要因を検討し、最も効率的にリラックス効果を出すことができる技法について導き出した研究である。テーマの設定については申請者の臨床現場での経験が活かされており、基礎研究の観点だけではなく、医療従事者の視点からも応用可能性の高い研究内容であると評価された。

論文はまず文献のレビュー研究により、従来のタッチング研究で検討されているタッチングの時間の長さや、施術者の資格の問題が論じられ、医療現場に導入するに際しての問題点が指摘された。次に実験1から実験3では皮膚の特性に応じて、下腿部と手へのタッチングにおいて、それぞれ効果的なタッチング方法について明らかにされた。最後のアンケート調査では、医療従事者を対象にアンケート調査が行われ、タッチングの現状と本研究成果の応用可能性について明らかにされた。これら一連の検討により、医療従事者がタッチングを導入する際の問題点を明らかにし、それに対して具体的で効果的なタッチング技法を明らかにし、さらにその応用可能性まで示された。

以上のことから、基礎的及び応用研究の両面において価値ある成果が得られたと評価され、今後の研究者としてのスタートラインに立てるものであると評価された。

口頭審査要旨

口頭発表では、序論から各実験概要の説明、結果、考察の順に、パワーポイントを用いてわかりやすく丁寧に説明された。さらに各々の研究における問題点も含め、今後の可能性についても論じられた。発表は zoom を用いて行われ、一連の研究発表について時間配分も適切で、制限時間 30 分を使って行われた口頭発表は、十分に練習を重ねて準備をした成果が伺えた。その後の質疑応答は 30 分間で行われた。副査の各教

員からの質問を中心に質疑が行われ、タッチングとはどのようなものか、各研究間のストーリーに関する大きな問題から、図表の書き方の妥当性などの細部の点まで指摘された。いずれの質問に対しても的確に納得できる回答が得られたと評価された。

さらに一連の口頭発表と質疑応答から、申請者が本研究全体の位置付けや問題点に関しても、客観的かつ俯瞰的な視野を有していると評価された。さらにコロナ禍による研究の限界も述べられ、今後の研究課題として示された。以上のことから今後の研究者として独立して活動していくための能力を有していると評価された。